

## 全国厚板シヤリング工業組合

## 切板の需要動向

(H21.6.16)

## 1. 切断量の推移

(単位:千トン)

	20年度				21年度	
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q
厚中板	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	99	94	81	53	50	40
規 格	562	559	542	434	380	350
合計	661	653	623	487	430	390

(出所)実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

- 20年度切断量は、前年度（253万トン）比2.4%減の247万トン。
- 20年度4Qは前年比24.8%減の487千トンで、四半期としては14年度1Q（530千トン）を下回る過去最低。
- 21年4月切断量は、前年比31.6%減の153千トンで月間過去最低。  
21年度1Qは前年比35%減の43万トンと想定。過去最低を更新。
- 2Qは同40%減の39万トンと想定。

## 2. 需要部門別動向

厚板シヤ業界の状況を概観すると、建産機など製造業部門の著しい落ち込みに加え、建設需要も一部を除いて長期低迷が続き、底が全く見えない状況にある。これにより切板需要も全国的に激減しており、目下、高水準にある在庫の調整が最重要課題となっている。

当組合が実施している月次調査によれば、足元の厚中板の切板状況は、1～4月計の受入量は前年比25%減、出荷量は同30%減となり、今年に入って需給規模が急激に縮小してきている。こうした中、在庫量は1月以降50万トン超えのハイレベルで推移しており、バブル崩壊後のピーク時（平成10年：50～60万トンで推移）のレベルで高止まり状態にある。

この在庫調整には、需要低迷下、予想以上の困難と時間を要するものとみられ、調整完了は年度後半以降にズレ込むとの見方が多くなっている。

シヤ各社は、当分の間、調整に向けて、需要に見合った母材申し込みの絞り込みが続くそうである。加えて、雇用問題、資金繰り問題、与信不安など差し迫った経営不安を抱えながら、この厳しい局面をどう乗り切るか、苦闘が続く。

次に、需要面をみると、建産機部門は、昨年10月頃から受注が急速に落ち込み、足元では大半の機種が70～80%の大幅減を余儀なくされ、惨憺たる状況が続いている。このため、建産機メーカーの生産計画は、下方修正幅がさらに拡大している。

一方重電分野では、送電用、原発向けなどエネルギー関連機種が比較的順調に推移しているものの、先行きは全く不透明の状況。

建設分野については、設備投資関連や中小建築案件は中止や延期が相次いでおり、各地区とも出件の減退が目立ち、厳しい状態が続いている。他方橋梁や都市開発関連の大型建築案件は底堅い動きを示し、ヒモ付き系建材シャーは、夏場の仕事量がやや少ないが、そこそこの操業は維持できそうである。しかし、鋼材の先安感を見越した発注の手控え、コンクリートへの変更、更にはゼネコンの海外ファブ起用の動き等が危惧されている。

一般店売り分野についても、ショッピングセンター、マンション等の中止・延期等の影響により、中小ファブの手持ち工事量は極端に少なく、低操業が続いている。このため各地区とも相変わらず荷動きが低調で、打つ手なしの状況にある。

一方、母材供給面をみると、メーカー・ロールの状況は、月を追って緩和してきており、足元の納期も大幅に短縮化している。一部メーカーが炉修後のロール再開を控えていることなどから、供給面の更なる緩みが懸念される。

シャー各社は、需要減退の長期化、進展しない在庫調整といった状況下で、昨年来のメーカー値上げ分の在庫を大量に抱えており、ユーザーからの厳しい指値との間で苦悩し、我慢を余儀なくされている。

こうした事態を踏まえ、鉄鋼メーカーが今後販価を含め供給政策をどう打ち出してくるのか、最大の関心事となっている。

なお、シャー業界における主要課題を列記すると、以下の通りである。

- ①メーカー販価の動向
- ②在庫削減
- ③雇用問題（助成金の申請、臨時休業、操業短縮等）
- ④資金繰り問題（信用保証制度の申請等）、与信管理
- ⑤コンプライアンス対応（独禁法、輸送条件、品質証明問題等）。
- ⑥建築分野におけるコンクリートとの競合、及び内外ファブの競合問題

主要需要部門の足元の動向を整理すると、概要以下の通りである。

## ①橋梁・建築鉄骨の動向

### （全 体）

橋梁・鉄骨とも夏場の仕事が薄く、6～9月の稼働が厳しい状況にある。秋口以降の回復に期待。

**(橋 梁)**

全国的に昨年後半はかなりの入札があったものの、中部以西の物件が多かったことや、関東ファブの総合評価制度への対応の遅れなどから、落札が関西ファブに集中した。この結果、関西ファブの手持ち工事量が21年度一杯あるのに対し、関東ファブは長いところでも上期～年末、短いところでは、すでに夏場の仕事が足りない状況にある。

しかし、今後6～9月にかけて、相当量の入札がある模様であり、その中に関東案件も多いことや、政府指導により年度内加工となること等から、関東ファブが受注する可能性が高いとみられる。従って、関東ファブの仕事量は、夏場は大きく落ち込むものの、秋口～年度末にかけて、回復するものと見込まれる。

**(鉄 骨)**

設備投資や中小建築案件の中止により、中小ファブの稼働は惨憺たる状況。

他方超高層ビル案件は、今のところ大きな計画変更は見られず、鉄骨需要としては高水準にある。しかし、ゼネコンによる、海外ファブ（タイ/MCS、中国/精工PD）起用の動きや、鉄骨価格の揺さぶりにより、発注遅れや発注数量が減少しており、大手ファブの夏場の山積みが極めて苦しい状況にある。

一方で、秋口以降は、海外ファブが手を出せない高級鋼を使用する建築案件（JPタワー、丸の内再開発、パレスホテル等）が続いており、各大手ファブは、秋口～来年夏場頃まではフル稼働を予想している。

**②産建機・重電・金属工作機械の動向****(建産機)**

建産機需要は、1～3月が底で、4～6月以降若干上向きに転ずるとの見方は完全に外れ、回復が実感できるのは年度下期以降にズレ込みそうである。各ユーザーの生産計画は、依然下方修正が相次いでおり、不透明感が増す状況下でシャー業は、山積みされた素材在庫の消化と、加工体制の再構築に苦慮している。

**(建設機械)**

4月の全体の出荷額は、前年比65%減。特に主力機種種の油圧ショベルは、同75%減と落ち込みが激しく、関係シャーの数が多だけに影響は甚大である。

一方建設用クレーンは、他機種よりも遅れたものの、現状はやはり同様の生産調整になっており、シャーの足元の加工量は60～75%減とみられる。

ダンプは、欧米向けが全くの不振で、一部機種を除き壊滅状態である。下期の生産計画も絶望的状況。

建設機械工業会では、09年度受注額を、前年比22%減、ピークの07年度比30%減と予測している。現況からすると、明るい見通しが発表されているが、シャー業の生産

に反映されるのは、ユーザー・協力会社・代理店等の余剰在庫が解消されてからであり、09年度中の加工量の回復は期待薄の状況。

#### (金属加工・鍛圧機械)

この分野は、建機よりも落ち込みが深く、長いとみられる。関連指標である工作機械の1～4月の受注額は、前年比82%減と著しく減少している。複数の大型プレスメーカーでは数カ月～半年間受注ゼロとの情報もある。金属工作機械も大量の製品在庫を抱えており、年内の切板納入は少量に終わりそうである。

過剰設備の現状下、自動車関連を含めた全体の需給ギャップが解消されない限り、この分野の回復は期待できない。

#### (重電)

総じて足元の需要は横ばいを維持しているおり、他の業種に比べると、この時期非常に堅調と言える。しかし、変圧器等の受注競争で円高の影響を受けて欧州メーカーに負けているケースが増えていることや、海外製鉄プラント案件の減少など、先行きは非常に厳しい状況。

また原発においても、年内は加工量を維持できるが、これが終了すると、国内原発案件は2013年まで空白状態が続くとみられている。

#### (参考) 厚中板成品の最終用途比率 (平成19年3月出荷分。厚板シャ工組調べ)

- ・ 建築用： 41%
- ・ 土木用 (橋梁等)： 11%
- ・ 産業機械用 (建機、金属工作機等)： 27%
- ・ 電気機械用 (重電等)： 15%
- ・ 輸送機用 (船舶、自動車、鉄道車両)： 6%

以上

## 全国厚板シヤリング工業組合

## シヤ業の厚中板在庫推移

(H21.6.16)

## 1. 組合員の厚中板在庫推移(自社所有分)

(単位:千トン)

	20/6末	9月末	12月末	21/3末	6月末	9月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
<b>在庫量</b>	<b>446</b>	<b>446</b>	<b>497</b>	<b>551</b>	<b>520</b>	<b>450</b>
前期比/量	8	0	51	54	▲31	▲70
前期比/%	101.8	100.0	111.4	110.9	94.4	86.5

■足元の21年4月末在庫は、55万トンと、バブル不況期の10年7月末(56万トン)の水準に達している(統計開始後の最高は4年1月末の74万トン)。

■シヤ業者は、とくに今年2月以降、メーカーへの母材申込量を大幅に削減しているが、それを上回って出荷が落ち込んでいるため、在庫が増勢を続けてきたが、5月中旬をピークに、需要動向を見据えた申し込み削減が奏功して漸減傾向に転じている。

■この状況が今後も続くとすると、9月末在庫は、45万トンまで減少すると想定されるが、それでも活動水準が低いので、在庫率は依然高水準で推移するとみられる。引き続き、メーカー、シヤともに在庫調整に向けて懸命な努力が必要である。

以上